

# ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部  
 ■発行日 　2006年2月28日  
 ■連絡先 　藤川博樹  
 　　　　　〒115-0045  
 　　　　　北区赤羽1-48-3-203  
 　　　　　tel03-5249-5797 fax03-3901-6090  
 ■編集 　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

## No.291

### 3月行事日程

■ニュース編集  
 原稿はテキストにして下記へ  
 ワード、一太郎文書も可  
 kamo@sun.email.ne.jp  
 エッセイ:5枚(2000字)  
 小説:10枚(4000字)目安  
 ■締め切り  
 3月17日(金)16:00  
 ■年会費  
 ふみの会年会費は1200円です。  
 切手80円×15枚  
 郵便振込:東京00170-1-18290



◆バンクーバー(カナダ)は海に突き出した細い半島の街で、その先端にあるスタンレーパークにあったトーテムポール群。色鮮やかで美しい。しかし古いものではなく、観光用に作られたものらしい。  
 1996年8月

新入会員紹介  
 大阪府阪南市在住 中川義朗 さん

この地にあたらしい道路ができる。  
 山は伐採の最中だ。測量も始まっている。たくさんのコナラが伐られて運び出された。  
 冬眠中のリスが眠りを妨げられて、右往左往する姿も目撃した。  
 イノシシたちは山に樹があったところと同じルートを変らずに駆け回っているのかもしれない。(雅)

昨夕、7時に駅に着いたかみさんを迎えにいつて戻る道すがら、イノシシの行列にあった。  
 わが家は戸数7戸の孤立した集落にある。山あいの道路を照らすヘッドライトのなかに、また若いイノシシの姿が浮かび上がった。  
 「あつ、イノシシだ。若いな」  
 じつは先日は昼日中に遭遇しているので、その普通の親イノシシにくらべるとひとまわり小さい姿に見覚えがあったのだ。かみさんもびくりして身乗り出す。  
 車は20キロくらいで走っている。  
 「1匹、2匹、3匹…」  
 判子で押したような、同じ姿形のイノシシが次々に山の斜面を下ってくる。  
 道の反対側は谷川で、道からは2mくらい落差がある。そこを次々にダイヴして、下ってきた斜面とは反対側の山の斜面へ駆け登っていく。  
 「5匹いたね。『もののけ姫』だね」  
 わたしたちは自然にわらっていた。  
 ふしぎに親イノシシはみない。狩られてしまったのだろうか。

## 俺たちの村 ⑬

蒲原ユミ子

13 おいしいスキー練習

エッサ、エッサ、エッサ!

陽平が雪山の中で、ストックを大きく前後にふりながらスキーをこいでいる。木立の間、すでに滑った跡を必死に進んでいく。ほっぺが赤い。だいぶ後ろを桜田先生がいつしゅうけんめついで行く。

隣り町といっしょに行うスキー大会の練習が始まったのだ。今年は雪が早く、たつぷりふつたし、陽平も初めて距離スキーの選手に選ばれた。もう上級生の選手たちはずうっと前を行ってしまった。陽平は一番年下だから、しかたがない。雪にはまだ慣れていない桜田先生はもつとしかたがない。選手たちの後をついてこれるだけいい方である。若いからできるのだろう。

とつぜん、「キャアッ」と声がし

た。陽平がふり向くと、先生の片一方のスキーが逃げるように木立の間をすべり落ちていく。止め具が外れちゃつたらしい。

陽平は方向を変え(よおーし)とスキーめがけてすべり始めた。雪面だから近道はできない。木立の間をぬって斜滑降のジグザグでおりにいく。

桜田先生のスキーはかなりすべり落ち、藪の雪だまりにつきささって止まっていた。陽平は2本のストックを左手で持ち、右手で桜田先生の真新しいスキーを拾い上げた。そして、こんどは雪山をカニのように横歩きでオイッチニー、オイッチニーと登っていく。

桜田先生は待っている間、のんきにあたりの景色を見たり深呼吸したりしている。

先生のところへ到着した陽平は顔

をまっかきさせ、汗だらけだ。桜田先生は拍手をして喜んだ。「ありがとう、陽平さん。頼りになるわ!」

ちよつとつかれたけれど、陽平はすぐくうれしかった。桜田先生の役に立つて、気持ちいいなあ。

桜田先生はスキーをしっかりはき直すと陽平に言った。

「それにしても、ここはなんてきれいな林なんでしょう! まるで、美しい木の妖精たちが立ち並んでいるようだよ。こんなところですべれるなんて幸せ!」

陽平にとっては当たり前の景色だが、ほめられるのはうれしい。陽平はウサギのようなじょうぶな歯を見せて笑った。

それから、桜田先生はひどく残念そうに言った。

「けれど、ここですべれるのは今年

限りらしいわね」

陽平は思い出した。そうか、このあたりもゴルフ場になってしまいうのか。

「こんな美しいところは、世界遺産に登録すべきなのに!」

桜田先生はくやしそうである。そう言われて、陽平もなんだかくやくしくなってきた。ゴルフ場では子どもは入れないし、自由に遊べる場所が少なくなるのではないか。陽平は、山村のじいさまの息子と話していたおじさんたちを思いだし、むっとした顔であたりを見まわした。さすがにこの雪では測量のおじさんたちの姿も見当たらないけど。

桜田先生は気持ちを入れかえるように、きつとした顔で前を向いた。

「だから、今のうちにいっぱいっばいすべっておかなくちゃあ!」

陽平もまた練習コースにもどって

すべろうとした時だ。

ワシッ

あたりの空気を静かにゆるがせる音がした。陽平が見上げると、アイツだった。

秋の遠足で崖に宙ぶらりんになった時、アイツの卵を見つけておそろいになったけど、泉や先生のおかげで助かった。

きょうのアイツは、上空を王者のようにゆうぜんと力強く羽ばたいていく。

ヒュンヒュンときれいな山の空気をふるわせて大空の向こうに去っていった。

「すごい・・」

桜田先生はほかあんと口を開けてアイツを見送った。そんな先生をしげしげ見ている陽平の目と合うと、ほうつと息をつきながら言った。

「あれは、ハヤブサに似ているけど、違う感じがするわ」

陽平も正確な名前は知らないし、鳥にはくわしくない。

「陽平さんは今までも見たことがあるの？」

うん、とうなずいてしまっただけから、陽平は（あっ、ひみつにしておくん

だったのに）と思い出した。それから、（あの卵はぶじにかえたかなあ？）とも思った。

桜田先生は力をこめて言った。「よし！ 学校へ帰ったら、図鑑とコンピューターで調べてみよう」と

2人がすべり出そうとした時、後ろから6年生の選手が追いついてきた。もう2周目に入ったのだ。陽平はあわててストックで雪をこいだ。

雪山が夕暮れてくる前にスキー練習を終えて、陽平たちは学校にもどった。

みんな、数キロをすべったり登ったりしているので、腹がぺこぺこだ。スキーを倉庫にしまい、家庭科室に向かうと、ふうくんといいにおいがする。思わず、陽平は廊下を走った。

中へ飛びこむと、すでにスキーの回転選手たちが食べている。ほかほかのおにぎりだ。

選手ではない6年生たちが、おむすび隊になって学校に残っている先生たちといっしょに作ってくれているのだ。これも、夏のオバケ大会と

同じで陽平の学校の伝統である。前もって選手やおむすび隊、それに先生たちが自分の家から持ちよってきた米で作っているのだ。

陽平はスキーの選手になってうれしいのは、スキー練習よりもこのおにぎりを食べることも知れない。

陽平は6年生の女子からわたされたおほかのおにぎりを大口開けてむしやぶりついた。ふいに、声をかけられた。

「そんなにあわてるなよ、おにぎりはにげないぜ」

いつのまにか、そばにいたのは、両手に2こおにぎりを持った泉だった。泉は3年生でやはり1人だけ回転スキーの選手に選ばれたのだ。回転スキーは大体同じ山でポールを立てて練習しているので、距離選手とは行きあわないが、おにぎりはいっしょに食べられる。

雪焼けしてきた泉のほっぺたにごはんつぶが1こついている。クールな泉らしくなくてもすごくおかしかった。陽平は口の中がおにぎりでもいいのまま、急に笑いだしたので、ご飯がのどにつまった。

「グホホッ！」

陽平がむせこんだら、泉がひじで陽平の背中をトントンたたいてくれた。

陽平は目をむきだしてご飯を飲みこんでから、泉にかつと笑った。泉もおにぎりにがぶりとかぶりついた。

転校して来たばかりの泉は、青白かったが、今では陽や雪に焼けて陽平とそんなに変わらない。すっかり村の子どもふうである。髪は相変わらずポニーテールだけだ。

泉は桜田先生と同じ町場育ちでスキーもほとんど初めてくらいなのに、あれよあれよというまにスキーになれ、選手にまでなってしまった。しかも、回転スキーの方が、頭の回転がよくないとたくさんのポールをクリアすることはできない。距離スキーなら馬力でけっこういけるけど。陽平はくやしいうけだと思った。（あっぱれなヤツめ！）

父親が病院から無言の帰宅をして、混沌市鼻曲町の鹿討万蔵邸には緊張が走った。弁護士がやってきて遺言状を読むのだ。この時にあたって、親類一同が集まっている。

「では、お読みします」

弁護士が封書を開いた。四人の兄弟姉妹とその一家が息を飲む。

「葬式を行った者に全財産を譲る。棺桶は葬儀屋に作らせてあるからそれを使うように」……

弁護士はそこで黙った。沈黙は数分間続き、一同に不審な空気が流れた。

「それだけかい？」長男の万太郎が口を開いた。

「はい、これだけです」弁護士が応えた。

「やれやれ……」腹違いの次男がため息をついた。

「変なオヤジだったけど最後までこれだ、まいったね」

「棺桶まで作ってあるとはねえ」長女が付け加えた。

「そうなる……」次女が不満そうに言った。

「葬式は万太郎兄ちゃんが喪主になつてやるんだから、財産も兄ちゃんの総取りということになるんじゃないの？……それは困るわ」

「困るつたつて、遺言なんだから仕方ないんじゃないの」長男の妻が冷たく言い放つと、

「しかし法定遺留分というものがありません」

長女の夫が強く返した。

「かみさんにも八分の一は取り分が保障されるはずですよ。そうですよね、弁護士さん？」

「はあ……」

弁護士は気のない声だった。

「まあ、相続放棄しないかぎり権利はあるわけですが、そのところは話し合いということ……税金もかかりますので、この家を処分するのですね、形見分け程度で我慢されたほうが……」

このやりとりで周囲を取り巻いていた叔父・叔母たちがため息をついた。目の前で相続争いをされてはたまらない。「それじゃ、着替えてくるから」などと言いつつばらばらと帰

り始めた。「あ、ご苦労様です、式の方は追ってお知らせしますので」長男の妻がその後ろから声をかけた。

「あんた、おとなしく引つ込むつもり？」

玄関へ向かいながら次女が、同腹の弟である次男にこっそりつぶやいた。先妻の子どもたちに財産を持つていられることが許せないのだ。

「わかっているさ、俺のワゴンの後ろを開けて待ってる」

いかにも堅気でない容貌の次男は車のキーを次女に投げてよこし、自分分は廊下をぐるりと回ってこっそり大広間へ戻った。そして誰もいないのを確かめて布団に横たわった老人を抱え上げた。巨漢の彼にとつて、骨と皮になった父親は片手で持てそうなくらい軽いものだった。彼は死体を抱えて座敷を出、縁側から裸足で庭へ降りた。低い生垣を抜けるとすぐ駐車場だった。

「早く！」

次女がワゴン車の運転席で手招きしている。後部座席が倒され、フラットな床へ父親を投げ込む。そして

自分も乗り込むと跳ね上げられていたドアを開めた。車はそれを待たずにタイヤをきしませて発進した。

「お父さんが盗まれた」と聞いて、最初長男万太郎はなんのことも分かんなかった。しかし空っぽの布団を見て「ひええつ」と素っ頓狂な声を上げた。

「卓美だ、あいつがやったんだ、財産狙いに！」

「どこへ行ったの？自宅かしら？」

長女もうろたえながら言った。

「たぶん葬儀社だろう。防衛処理していないし、棺桶もあるからな」

「だったらさっさと追いかけてなさいよ」

妻に怒鳴られて長男は喪服のまま外へ飛び出した。彼の車は黒塗りのポンテアック・グラウンドムで、それに喪服で髭面の大男が乗っているのだからパッシングしなくても前の車が道をあける。時々歩道のゴミ箱などを蹴飛ばしながらもの十分ほどで混沌第一葬儀社に着いた。

「おう、鼻曲の鹿討だ、うちのオヤ

ジの棺桶どこだ？」

長男はわめきながら葬儀社の事務所へ乱入した。そこには目を白黒させている小男の社長と、つがいのダルマのような弟と妹が立っていた。

「いやがったな卓美、この人非人！……オヤジを返さんか！」

そう叫んだ時、彼の目に巨大な棺桶が映った。

「なんだこれは……」

それは桶というよりはシルバーメタルの金属の箱で、小ぶりの車輪までついていた。周囲には歯車やボルト、色とりどりの配線がむき出しになっている。車輪が上下し、箱は波のように揺れている。まるでスイングするミュージシャンのようだ。高音と低音、二種類のうなり音がして耳障りなほどだった。

「お父様のご遺体を安置しましたら、とたんに動き出しまして……」

社長はへどもどしながら説明した。「オヤジ、棺桶になんか仕掛けしたみたいだぜ、どこで作ったのか、社長も知らないんだってさ」

次男がへらへらしながら言った。彼は遺体が兄の手に入らなければそれでよかったのだ。

ふみの会ニュース (5)

「なんでもいいから停めろよ、とにかくうちに連れていかなきゃ……」

「こんな大きなもの、運ぶ霊柩車がないんだってよ」

あわてる長男の横で妹がつぶやいた。その途端、棺桶は猛然と走り出した。「わっ」と驚く四人を残し、銀色の箱は葬儀社の玄関を走り出、国道をまっしぐらに北へ向かった。『ナビゲーションいたします……本車は国道六号線を取手方面へ向かっております』大音響でアナウンスしながら走る棺桶に通行人も運転者も驚いた。

「おい、ぼーっとしとる場合か、追いかけるんだよ！」

さっき妻に怒鳴られた万太郎が今度弟を怒鳴りつける。ポンティアックとワゴン車はアクセル全開で棺桶を追った。

「おい、オレだ、いま棺桶を追いかけてるところなんだ、取手警察に、停止させるように連絡してくれ……棺桶だよ、カンオケ！」

長男は携帯で妻に指示したが妻はさっぱり要領を得なかった。それでも警察に国道で、ただならぬ事態が起きていることを報せることにはな

った。棺桶と二台の車はなぜか信号にひっかかることもなく大利根橋をつつきり、取手駅前

のを通り抜け、土浦方面へ進んでいた。ポンティアックは爆走して棺桶に追いついたが、そこからどうしていいのかわからなかった。思い切つて前に回り急ブレーキをかけてみると、棺桶はポンティアックを軽くすり抜けた。今度は幅寄せしてボディにぶっつけてみたが、重い棺桶はびくともせず、逆に車のバンパーがひん曲がった。百キロ近いスピードで棺桶がどこへ向かっているのか、誰にも分からなかった。

「非常線だ！」

藤代駅の近くに来て、渋滞している車列が見えた。その向こうに数台のバトカーと車止めが並んでいた。長男はホッとした。これで棺桶の暴走も終わりだ。

『右折します、右折します、ご注意ください……本車はこれより龍ヶ崎方面へ向かいます』

棺桶のカーナビはそう絶叫しているきなり方向転換し、またも赤信号ギリギリで県道五号線に飛び込んだ。

一瞬ためらったが、長男も目をつぶって交差点へ飛び込んだ。とたんにけたたましいクラクションが鳴り響き、サイレンがうなり、バトカーと白バイが群を成してポンティアックを追い始めた。棺桶の爆走は盛大な

お供を連れてますます豪華なものになった。

(なに考えてんだよ、親父……遺産分けがいやならそう言えばいいじゃないか、なんだってこんなふざけた真似をするんだ……)

長男は呆れて馬鹿馬鹿しくて、もう遺産のことなどどうでもよくなってきた。しかし引き返すことは出来なかった。爆走はまだまだ続いた。

「それで、鹿島まで行って海に飛び込んでおしまい？」

長女の空ろな声に長男が頷いた。彼の目の裏に波の向こうでキラキラ光るジュラルミンの箱が浮かんだ。

「じゃあ、葬式どうすんのよ」次女が聞いた。

「遺憾なしでやるしかないだろうな」次男が応えた。

「なんてまあ……」

四人は顔を見合わせてため息をついた。その後分かった事は、邸宅以外の預金・有価証券類はほとんど生前に処分されていたことだ。海外の難民・飢餓救援組織に寄付されたらしいがはっきりしたことは不明だ。

混沌市の豪商、鹿討万蔵の生涯は謎だらけだが、その最後ほど謎の多いシーンはなかった。

小田原で聴いた

モーツァルトの『レクイエム』(一) 瀧本文彦

新聞広告で、モーツァルトの『レクイエム』短調・K626の演奏会があることを知った。

「縦に並ぶ席なら二階席の左右の端が空いております。よろしければ、どちらになさいますか？ コントラ

バスの方か、ヴァイオリンの方か、いずれもB席で一人様3000円です」

僕はヴァイオリンの方に決め、息子の昇一に電話した。

「僕はクラシック音楽は分からないんだけど」

「聴かないうちから決めつけちゃいかんよ。それに、CDやMDで聴く音とは違う、ナマのオーケストラの音だぞ、ナマの合唱団の声だぞ。きつと心に残る音楽だから付き合え。里絵も誘ってくれ」

と言つて電話を切った。里絵は昇一より五歳年下の妹である。

翌日、銀座の山野楽器店に『レク

イエム』の楽譜を買いに行った。億劫な僕が動き出したのである。

なぜ、これまで『レクイエム』の生演奏を聴きに行かなかったのだろうか。いつでも聴ける。それに入場料が高い。ベルリン・フィルやウィーン・フィルはB席で8000円くらいしやしないか。

息子から電話が入った。「聴きに行く。里絵は部活もあり、試験勉強があつて行けない」と言った。小田急線・本厚木駅改札口で12時に息子と待ち合わせる事になった。

僕の持っている『レクイエム』のCDは、

指揮 ヨゼフ・クリツプス  
管弦楽 ウィーン宮廷管弦楽団  
合唱 ウィーン宮廷合唱団  
ソプラノ ウェルナー・ペック  
アルト ハンス・ブライトショッフ  
テノール ワルター・ルートウィヒ  
バス ハラルド・プレグラーフ

による演奏で、時々聴いていた。いつも音量を絞って、しんみりと聴いた。モーツァルトは『レクイエム』を作曲している途中で力尽き、未完成のまま死んでいった。大音量で聴くよりも、音を絞って聞く方『レクイエム』に相応しいと思ったからである。

『レクイエム』のイントロ・テンポはアダージョ。弦の伴奏に刻まれて、ファゴットが静かにメロディーを奏でる。

まもなくファゴットと同じメロディーで、バセット・クラリネットの音が5度上に絡む。対位法である。イントロから胸が締めつけられる。作曲された動機を思い、その頃のモーツァルトの生活上の困窮を思う。

豊かな報酬を約束されて書かれたモーツァルトの作品は数える程しかない。最後のピアノ協奏曲『第26番 二長調・K537(戴冠式)』はレオポルト二世の戴冠式のために書いた

指揮 ハンス・マルティン・シュナイト  
管弦楽 神奈川フィルハーモニー管弦楽団  
合唱 神奈川フィルハーモニー合唱団  
ソプラノ 澤畑恵美  
メゾソプラノ 竹本節子  
テノール 近藤政伸  
バス 黒木純  
会場 小田原市民会館  
開演 14時

と書かれていた。僕は直ぐ電話をかけた。「空席はありますか？ 三枚分あり

曲である。二世即位の際、かねて望んでいた皇室付ピアノ教師の地位にありつかなかったモーツアルトは、自費でフランクフルトへ赴き、個人的に演奏会を開く。『第26番（戴冠式）』は、このときに演奏されたが、却って借金をふやす結果になった。

モーツアルトは幼少の時代から旅に明け暮れた。天才曲芸師として諸国の貴族に拍手喝采で迎えられた。しかし、所詮は保証のない旅芸人であつた。

ザルツブルグの大司教と喧嘩し、仲裁に入ったアルコ伯爵に突き飛ばされて背中を足蹴にされるといふ事件もあつた。蹴られたモーツアルトの胸中には貧乏への口惜しさがあつたろう。それでも、モーツアルトは金銭に無頓着だつた。

(つづく)

## 下 関 (一)

中 井 豊

昨年末、松原静司さんから、「おい、フグを食べに下関へ行こう。温泉も付いて一万円のツアーや。予約しとくぞ」と電話があつた。

かつて下関は五度ばかり通過したと思うが、いずれも列車で関門トンネルを抜けるだけだったので、歴史とフグで有名な港町だという知識しかなかったので、行ってみることにした。

『日本史年表』(岩波書店)を開くと、一八六三年(文久3)五月一日、長州藩がアメリカ艦船を、続いてフランス艦・オランダ艦を砲撃した。翌年(元治1)八月五日より、アメリカ・フランス・オランダ・イギリス連合艦隊に砲台を攻撃されて

長州藩は降伏し、同月一四日に講和条約を結んでいる(日付は陰暦)。これを、下関砲撃事件(馬関戦争)という。

一月二〇日一八時四〇分、松原さん、中島さん、私の三人連れは暗い大阪南港から名門大洋フェリー「ふくおか」に乗船した。中島さんは髭面の歯科医師で、これまでも共に旅したことがある。私の他は九州男児である。

船は定刻の二〇時に岸壁を離れた。明朝にかけて、瀬戸内海を新門司港まで、どこにも寄港しない。船内は広々としている上に、冷暖房完備で快適だつた。部屋を確認し、荷物を置いて、船窓に面した半円形のソファーに陣取り、私達は闇に閉ざされ

た窓を眺めながら焼酎を呑み、夕食にする。打ち合わせずとも、それぞれが焼酎の瓶を一本ずつ持参してきていた。

ちよつと席を外している間に、松原さんが韓国人の三人家族と一緒に焼酎を呑み始めていた。相手は殆ど日本語ができないが、夫婦と奥さんの母親であることは「オモニ」という単語でわかつた。奥さんは学校の先生で多少英語ができる。その友人も参加した。

お客の減つた広い食堂には空いたテーブルが幾つかあつたので、皆で隅のテーブルへ移動した。離れたテーブルで、若い西欧人が一人して電子辞書を開いて何やら勉強している。声をかけると、彼もこころよく加わつた。カナダから来て三重県で英語教室を開いているとのことだつた。「オモニ」手作りの美味しい干し柿を食べた。

八人で呑んで騒いでいるうちに、深夜になり、周りの人影もずいぶん少なくなった。全員で記念写真を撮

って、船旅ならではの宴会はお開きとなった。

翌二一日早朝、起き抜けに船内の共同浴場に入った。一〇人位はゆったり浸かれる広さがあって、さっぱりした。甲板へ出てみると右舷に、

かすかな朝靄を通して陸地が青く見える。時刻は七時三〇分、企救(きく)半島(北九州市門司区)だろうか。残念ながら、日射しはない。

やがて船は新門司港に入った。昨夜は気付かなかったが、下船する人々の中に上海からの子供の団体もいた。修学旅行のようにも見えた。待合室で西鉄観光のガイドさんが出迎えてくれた。

待機していた観光バスで新門司港から門司市街まで走る。最初に案内されたのは、門司にある和布刈(めかり)神社——大晦日の夜中にワカメを刈り、元旦に神前に供えることと有名な神社だ。境内には海へ下りる石段があつて、関門海峡の波が寄せている。背後の頭上に関門橋が架

かる。一九七三年に完成した全長一〇六八mの吊り橋だ。ここから「平家一杯水」を見て、ノーフォーク広場まで歩く。ノーフォーク市はアメリカ合州国ヴァージニア州の古い軍港都市で、北九州市の姉妹都市になっているという。

関門海峡には国際航路が通っている。向かいの下関までは、海流さえなければ泳いで渡れるくらいの距離で、初めての私には意外な狭さだった。だからこそ魚が美味しいのである。

この辺りの海域を「壇ノ浦」という。安徳天皇を奉じた平宗盛を総大将とする平家が義経に敗れた海域だ。『平家物語』によれば、八歳の安徳天皇は

「尼せ、われをばいづちへぐしてゆかんとするぞ」

と二位尼(清盛の妻、時子)に言いながら神璽と宝剣を持つ按察局(あぜちのつぼね)に抱かれて入水した。この「壇ノ浦の合戦」を最後に、平家は滅びる。

バスへ戻り、私達は関門橋を渡って下関に入り、うねるような道路を登って火の山展望台で下車した。幕末、火の山の頂上には長州藩の砲台があつて、ここから外国船を砲撃し

たという。展望台に立つと、左手にだけ薄日が射して海に映えている。全体の風景はどんより沈んでいる。

(つづく)



火の山頂上(下関)より門司を望む



# 遙かなる戦火

内田幸彦

(一) 『海征かば』

『海征かば』は一九三七年（昭和12）、国民唱歌第一回としてラヂオ放送された。日中戦争（日支事変）を念頭に置いた発表だったと思う。

海征（ゆ）かば 水漬く屍

山行かば 草むす屍

大君の 辺にこそ死なめ

顧みはせじ

沈痛・荘嚴な曲として、式典、あ

るいは葬送のための曲として用いられた。ことに、日中戦争初期の「英霊」（戦死者）の帰還に用いられ、出迎える人々の涙を誘った。

作曲は信時潔の手になるもので、

歌詞は『万葉集・巻一八』に見える、大伴家持の長歌の一節である。別に、

一八八〇年（明治13）に宮内省伶人の東儀季芳が海軍儀式歌『海征かば』という曲がある。

英霊が帰還すると、沈痛な『海征かば』をゆっくり流しながら、在郷軍人・国防婦人会・青年団・町内会・小学生たちが、揃って駅頭から英霊の自宅「誉れの家」までの道を辿った。

間もなく英霊の帰還が途絶えた。国民に不安を与えるというのが、その理由だった。

国は、歌謡曲も「軍国歌謡」と銘打ち、『軍国の母』『日の丸行進曲』『上海だより』『あゝ我が戦友』『父よあなたは強かった』と愛国精神を強調した。

標語では、「誓沢は敵だ」「撃ちてし止まん」「二億一心」「鬼畜米英」「月

月火水木金」と国民の尻を叩いた。国民も水際作戦（海辺で敵軍をくい止める）を覚悟していた。

不平不満を口に出し、特高警察・憲兵の耳に入ると直ちに拘引された。今で言う「洗脳」の結果だが、当時の国民は本当に死ぬ気でいた。君（天皇）のため、国のためと、続々志願・入隊し、何の悔いも反省もなかったのである。熱病に浮かされていたとしか言いようがない。

日清戦争（一八九四～五年）、日露戦争（一九〇四～五年）に大勝し、自信を持った日本は、益々侵略意欲を高め、一九二八年には張作霖を爆殺し、満州事変を起こし、さらに日中戦争へと戦線を拡大した。

だが、現実には日本の思うほど甘くはなかった。日本の横暴に、連合国（アメリカ・イギリス・フランスなど）が参戦してきたのである。それは多分に予想できた事でありながら、情勢はブレーキが掛からなくなつて

いた。

敗戦と共に、一八〇度転換して、日本は自由の世となった。思想の自由・言論の自由・宗教の自由・個人の自由と、有難い事づくめで、日本人は有頂天になり、六〇年。過度の自由に蝕まれ、人々の美質は失われた。

日本人には、軽率でオツチヨコチヨイの要素がある。平和で豊かになつたが、失つたものも決して少なくないと私は思っている。

## ヒカル君の冒険 10

藤川博樹

## お父さんと遊ぶ

ヒカル君は、日曜日にはお父さんと家の中でゴムボールで野球をやったり、戦いをやったりして遊んだ。

お父さんが投げるゴムボールを、ヒカル君がビニールのバットを振り回して打つだけけれど、小さいころから何年もやっていたうちに、ヒカル君はだんだん

うまくなってきた。最初は、お父さんが投げるスポンジのボールを、三十センチくらいの長さの太いビニールバットで、打ち落としていた。

「第一級のモーション、ピッチャー、投げましたー!!」とお父さんが言って投げつけてくるボールを、ヒカル君はなたを降り下ろすように両手でバットを振り下ろして、はじき返した。

この遊びが面白くなってきて、頻繁に繰り返し、スポンジボールは見事にはじき返された。

そのうち、三十センチのバットは、八十センチの赤バットになり、スポンジボールは、ゴムまりになってスピード感が増してきた。ヒカル君は、野球というものがどういふものかまだ理解していなかったけれど、野球に夢中になった。お父さんが三球投げて打てなかつたら、三振で交代だ。お父さんは打たせな

いように、高く投げたり、低く投げたり、ヒカル君が構えていないうちに投げたり、後ろを向いたまま投げたりした。ヒカル君の裏をかいて空振りさせると、ヒカル君は泣きそうなくらい悔しがった。緩急ついたり、打ち気をはぐらかしたりというあらゆる勝負のテクニクを駆使してヒカル君に挑戦した。

そのうち、一塁二塁三塁という塁ができた。ヒカル君のうった打球をお父さんが取れないと、一塁打だ。つぎにまたヒットを打つと、二塁に進む。三塁にランナーがいてヒットが出ると点が入った。スリーアウトで交代だ。お父さんは、赤バットを素振りしながら、「長島だー」と言っただけで構えた。ヒカル君は、長い間、「ナガシマ」というのは「野球」のことだと思っていた。野球はだんだん回を重ねるようになって、一対一、二対一、三

対二、三対四などと、接戦になった。五対四とヒカル君リードのまま、ついに最終回、お父さん最後の攻撃、ここからお父さんは連打、連打で満塁になった。

「九回裏、ツーアウト満塁!!」とお父さんが叫ぶと、ヒカル君の顔はひきつってきて、青ざめている。ピッチャーの手も縮こまって、いい玉が投げられない。ヒカル君、投げました、打ちました、ピッチャーゴロ、アウト、ゲームセット!

ヒカル君はついに勝利の美酒をかみしめ、満面の笑みを浮かべた。